

研究題目：グリゴリー・ポメラントフの思想 ―深淵、禅仏教、スプエクメナ論―

研究計画：

―はじめに

Covid-19 の感染が進む今日、グローバル化が再び問題になっていると思われる。しかし、真の感染症対策はグローバル化から退き、孤立主義的スタンスをとるべきではない。ハラリが言うように、今の時代こそ、むしろ、グローバルな信頼と団結が不可欠でなければならない。グローバル化だけではない。Covid-19 以前にも、既存の人間のあり方、倫理、学問、社会、自然との関係などは強く問われていたが、Covid-19 はこれらの諸傾向をさらに強化したと言っても過言ではない。我々はこれからどのように新しい世界観、人間観、自然観、学問を創造すべきか、あるいは、創造できるでしょうか。そういう難解な問いを思想的に考えるとき、異文化間の対話が前提としての定石を置いた方が有効になるのではないか。

もし、そうであるならば、そういった開かれたパースペクティブをもちながら、新しい基礎づけのための比較が可能になると考える。本研究において、ロシアと東アジアの異文化哲学は現代ロシア思想家であるグリゴリー・ポメラントフ（1918-2013）の思想を事例に、どのように形成されたのか、明らかにする。

今日でも、ロシアの位置付けとアイデンティティが問われている知的背景において、ポメラントフの思想の多重かつ複合的性格（西洋的＋東洋的）は人類文明が直面している様々な倫理的な問題にたいして、新たな思想的観点と手がかりを与える可能性を持つと思われる。面白いことに、主流の現代ロシア思想家と違い、ポメラントフはロシアの霊性をめぐる問題をロシア正教的な世界観の枠に留まらず、さらに広い意味で解釈し、様々な宗教における霊性の問題と関連づけようとしている。とりわけ、ポメラントフは禅における霊性にも大きな関心を寄せていた。申請者はまだあまり研究されていないポメラントフの思想が現代ロシア思想史において重要な位置を占めると考える。ロシアおよびほかのロシア語圏の国々をのぞけば、まだほとんど知られていない彼の思想を検証することは異文化哲学という枠組みの中で、大きな意味と新たなパースペクティブを提示するのはと考えるとされるからです。

具体的に、申請者は以下のような目標と課題を設定する。

I. ロシアという歴史・哲学的コンテクストのなかで、ポメラントフの思想の位置づけを行うことを目指す。ポメラントフの思想は多元的な性格を有するため、次のベクトルで進みたい。

1.1 ロシア宗教思想史という土台とその性格を考えるために、次のロシア語の著作を中心に検討する。V. ゼンコフスキー『ロシア哲学史』（1991）N. ベルジャエフ『ロシアの思想：十九世紀と二十世紀前半の主な問題』（1971）、E. ラドロフ『ロシア哲学史の概要』（1920）、N. ロッスキー『ロシア哲学史』（1991）。

1.2 「東洋」と「アジア」という問題をめぐるロシアの認識を考察するため、次の著作を検討する。K. サヘーニ『ロシアのオリエンタリズム』（2000）、シンメルペニンク＝ファン・デル・オイエ『ロシアのオリエンタリズム』（2013）、B. Lewis “*Imperial Visions*”（1999）、S. Layton “*Russian Literature and Empire*”（1994）。

この I の分析は本博士論文の第二章に当たるものであり、今年度の 6 月までに完成すること

を目指す。

II.ポメラントフの思想において、禅は重要な位置を占めているため、この禅理解を総合的かつ客観的に考察する必要がある。

2.1 ロシア仏教学におけるポメラントフの禅研究とその認識の位置づけを行うことを目指す。

まず、ロシアにおける仏教と仏教学の歴史に関する次のロシア語の著作を検討する。V.コルネフ『ロシアにおける仏教』(1992)、E.トルチノフ『仏教学入門 サンクトペテルブルク大学講義』(2000)、O.ローゼンベルグ『仏教哲学の諸問題』(1918)、F.シチュエルバツコイ『仏教の特選論文集』(1988)、V.ショーヒン『F.シチュエルバツコイと彼の比較哲学』(1998)を検討する。ポメラントフの禅認識を考察するためのポメラントフの『東洋の宗教的ニヒリズムにおけるいくつかの潮流』(1968)、『世界宗教について』(2012)を検討する。

2.2 ポメラントフの禅理解は鈴木大拙の哲学に基づいているので、鈴木大拙の著作を考察する必要がある。大拙の”*Essays in Zen Buddhism*”(1927, 1933, 1934, 1949)、『禅と日本文化』(2013)、『日本的靈性』(2014)を検討する。大拙の禅哲学を相対的に分析するために、次の著作を参考する。

B. Faure “*Chan Insights and Oversights*” (1993)、安藤礼二『大拙』(2018)。

2.3 禅を研究するため、ポメラントフがロシア記号論というアプローチを採用したため、その方法論の特殊性と妥当性を考察する。そのため、V.イワノフ『ソ連における記号論歴史の概要』(1976)、Y.ロトマン『セミオスフェラ』(2000)を検討する。

このIIの分析は本博士論文の第五章に当たるものであり、来年度の8月までに完成することを目的とする。

III.ポメラントフの「スブエクメナ論」という文明論を総合的に考察することを目指す。

3.1 一次資料としての『スブエクメナ論と交差的文化の特殊性』(1970年代前半)、『古層の持続力』(2004)を精読する。Y.シェミヤキン「比較歴史的パースペクティブにおけるスブエクメナと「境界的」文明」(2014)を検討する。

3.2 スブエクメナ論の主な二つのテーマ宗教とグローバル化であるため、宗教とグローバル化を基準として考える他の文明論との比較は有効となるだろう。したがって、ハーバーマス『ポスト世俗化時代の哲学と宗教』(2007)、R.Bellah “*Beyond Belief*” (1970)、P.Duara “*The crisis of Global Modernity*”(2014)、C.Taylor “*Secular age*”を検討する。

このIIIの分析は本博士論文の第六章に当たるものであり、来年度の10月末までに完成することを目指す。